査読者を味方につけるには

知能グループ主査
吉田稔
（東京大学情報基盤センター）

査読者は敵ではない

- 投稿者の視点：
  - 査読者・・・論文に難癖をつけて落としに来る敵
    - 「落とすことが目的？」
- 査読者の視点（実際）：
  - 基本的には、通せる論文は通したい
    - べからず集：「石を拾うことはあっても玉を捨てることなかれ」
    - 査読者が厳しい場合にはメタ査読者がフォローする
  - 採録条件：「最低限これは満たしていないと論文として出版できない」

よくある不採録理由

- 新規性がわからない（業界全体における位置づけ不明、サーベイ不足、比較実験がない、手法に意義が不明）
  - 「ここが新しい、優れている」ということを明確に言う必要
- 評価の正当性
  - 比較実験の対象は、上記の新規性を示せるようなものにする
- 論文として体裁が整っていない
  - 推敲は十分に行う
  - 他の論文のフォーマットを参考にする

採録条件はAND

- 基本的に、採録条件に書かれたことはすべて対処してくれないと、「最低限の基準」を満たせない
  - 条件を無視すると、「対処できていないので不採録」とせざるを得ない
  - 必ずしも再実験が必要とは限らない
  - 「何故この論文を出版する価値があるのか」が明らかになればよい（査読者を納得させればよい）

精度 ≠ 論文の良さ

- 「良い論文（手法）＝最高精度を達成する手法」ではない
  - ×筋の通らない実験で、「精度が＊ポイント向上」
  - 〇筋の通った実験で、「～な手法で、～と同等の精度を達成」
  - 前者を主張されても通せない